

本日からエステル記を学びます。ルツ記と並んで女性の名が書名となっています。エステルという人物によりユダヤ民族が救われたことを記す書です。学んでいきましょう。

### 1. 王妃の不服従 (1章1～12節)

- ①アハシュエロス王 (1・2) ペルシヤの王。歴史ではクセルクセス一世。ダリヨス大王が紀元前486年に死んだ後に権力を得たのです。彼の王としての治世は前486年から465年。ヘブル語ではアハシュエロスと発音されていたのです。当時、彼はホド(インド)からクシュ(エチオピア)までの127州も治めていたのです。その城はシュシャンにありました。\*シュシャンはエラム州のウライ川のほとり。ペルシヤ王国の首都の一つ。ペルシヤの都としてはペルセポリスも知られている。
- ②宴会 (1:3～8) 治世第三年(前483年)に、王は宴会を催しました。ギリシヤ遠征(前483-480)への景気づけと準備会議の場ともなったのです。ペルシヤやメディアの有力者が集まってきたのです。180日もその宴は続いたのです。王国の富や栄誉を示すためでした。その期間後に七日の園の庭で宴を催しました。柱、長いす、床などが豪華にしつらえてありました(6)。振る舞い酒も上質で種類豊富でした(7節)
- ③王妃ワシュティ (9～12) 一方、王妃ワシュティも婦人たちのために宴を催していました。王には妻が複数いて、ワシュティはその一人と考えられています。さて、宴の七日目、王は酔って七人の宦官に、ワシュティに王冠をつけて宴にやってくるように命じました。美しい王妃を民や首長たちに見せるためでした。ところが、王妃は辱めとこれを受け取って拒みませんでしたので、王は怒り心頭となります。

### 2. 王の勅令 (1章13～22節)

- ①七人の首長 (13～16) 王は法令に詳しい知恵者たちに相談したのです。七人の首長たちで王国の最高の地位にありました。欧はそこで、王の命令に不服従のワシュティについての法令上の裁きを協議させます。その一人メムカンは王と首長たちの前で、「王にも首長にも全住民にも不法を行なった」と述べます。
- ②夫を軽く (17～18) 王妃を断罪する理由は、王の命令に従わなかったことにより、女たちが自分の夫を軽くみるようになり、首長の夫人たちもこれを見習うようになるだろうというものでした(17～18)。王の権威と男性優位社会を保持しようとする意図が読み取れます。
- ③勅令の進言 (19～22) メムカンは王に勅令の進言をします。その内容は、ワシュティは王の前に出るはならないというものでした。すでに王妃という名前がとられています。法令として変更できないようにするという念の入りようでした。そうすれば、王国の隅々まで自分の夫を尊敬するようになるでしょうという理由でした。この進言は王にも首長たちにも受け入れられました。王はすべての州に書簡を出します。男子はみな一家の主人となり、妻は夫の民族の言葉で話すようにという通達でした。

### 3. 新王妃捜し (2章1～7節)

- ①王の従者の勧めと王の決定 (1～4) 時は数年たち王がギリシヤ遠征に失敗して、帰国した紀元前479年頃と考えられます。アハシュエロス王の怒りはおさまらず、ワシュティのこと、その行動、決定事項などを思い出しました。王に仕える若者が言いました。「王様のために美しい未婚の娘を捜しましょう。王様は任命してその候補者をシュシャンの城の婦人部屋に集めさせて、宦官ヘガイの管理のもとに必要な品々を彼らに与えてください。そしてその女性たちの中から、王の心にかなうおとめを王妃としてください。」王はこれを受け入れて、そのようにしました。
- ②モルデカイ (5～6) さて、シュシャンの城にひとりのユダヤ人がいました。その名をモルデカイといいました。ベニヤミン部族出身でした。曾祖父はキシユといい、バビロン(新バビロニア帝国)のネブカデネザルの時代にユダヤ王エコヌヤとともに、エルサレムから捕囚されてきた人でした。
- ③エステル (7) モルデカイはおじアビハイルの娘で(2:15)、ユダヤ名をハダサ(ミルトスの木の意味)、ペルシヤ名エステルを養育していました。両親が早くに死んだからです。エステルはペルシヤ語では星と言う意味。彼女こそが、ユダヤの民を救うことになる女性でした。

**【結論】** エステル記1章を読むだけでは、キリスト教徒として霊的な学びをする部分がなかなか見当たりません。ペルシヤ帝国の王の政治と振る舞いについての記事は、日本史の中にもうかがえる出来事です。2章を読むに及んで、少し視界が開けてきます。アハシュエロス王のわがままや独善により、法的に王妃はさばかれたという1章から、新たなる王妃を捜すという2章の展開へと入っていきます。その時に、出てくる人こそユダヤ人のモルデカイであり、養女エステルなのです。このユダヤの人々に、何が起きてくるかについては、今後読んでいくこととなります。今朝は、ここから一つのことを学びます。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」(ローマ8:28)という御言葉です。ペルシヤ王のなしたことやその経過には悪事や不道徳まみれです。しかし、主なる神はそんなことをも働かせて益としてくださる方なのです。